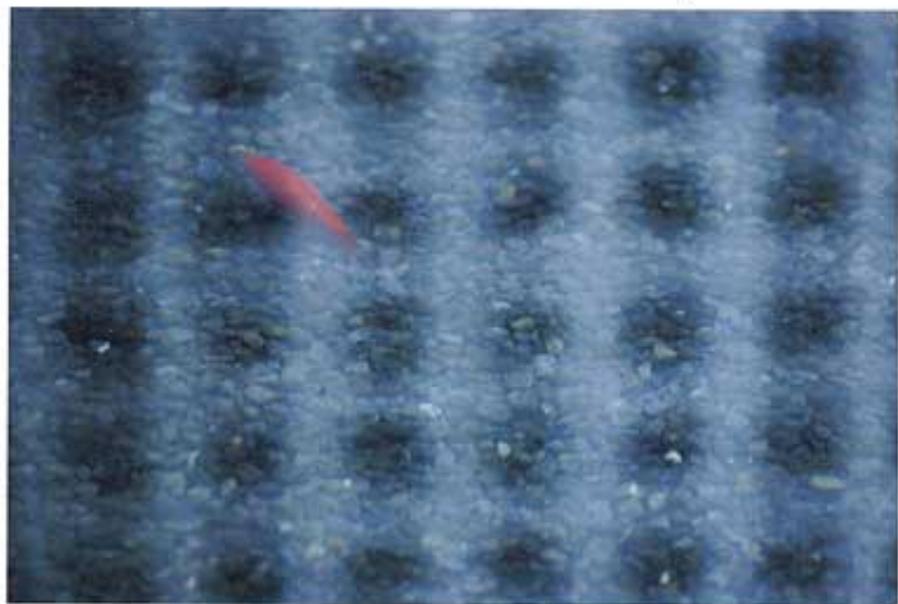


あを

8

2008



踊りの輪ちぎんだ処にて手うつ

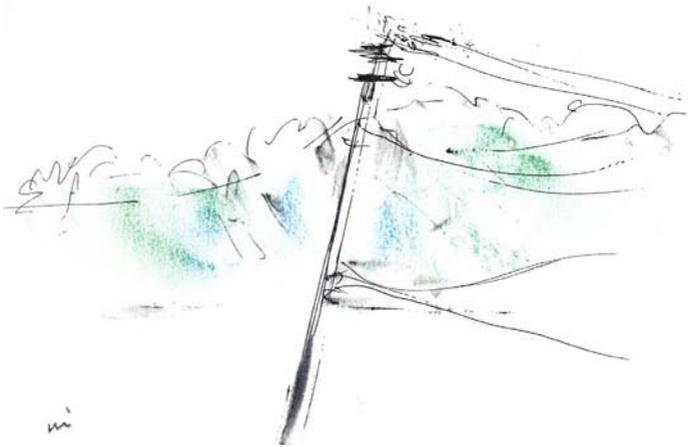
飛旅子

踊りの輪ちぎんだ処にて手うつ

田川飛旅子

あを

八 月



動物園

本三宮前

佐藤喜孝

立ちつくすバイソン冬の苦髪かな
することもなく四つ脚で冬を立つ
縞馬の縞の辻棲尻の穴
冬ざれし土にごろ寝のカンガル
かやねずみの正體は影去年今年

弔ひの人くちぐちに虹称ふ
六月の夕焼け古書を買うて出て
下刈りののこせる螢袋かな
父の日やするめ炙れば反りかへり
息長の鵜がゐて南風の浪愉し

輪島

定梶じょう

朝の地震な栗駒山の岩かがみ
清々とむしかり咲けり鬼無里かな
友の子に縁談ありと青山椒
一病を持って集ひし夏半ば
酒苦手卯の花腐し同窓会

所沢 須賀敏子

春泥やもう来ないかも薬売り
げんげ田が一望出来る里の駅
夫漬けてくれし梅干あと僅か
ふんだんに麦埃立ち日は落ちる
物置を遠まはりして茄子畑

本三宮前

鈴木多枝子

燕の巢

浦和 竹内弘子

花二三のこして臯月刈り込まる
椋の木の虚のあかるし梅雨晴間
雨もよひ淡黄色の山法師
梅雨しとど身体髪膚DNA
子どもらと口開いて見る燕の巢

熊ん蜂

田端 田中藤穂

夏至の夜の雨音ざわと高まれり
男声夜を白々とダチュウ咲く
居眠りに飛込んできし熊ん蜂
アガパンサス蕾の放つ鶴の声
喉に貼る湿布梅雨入りの昼眠し

明

夕焼や明日の燃すものなきごとく
未明より音高くせり走り梅雨
夏至の日の雨のちくもり野菜便
海風を林にはこぶしやぼん玉
夏めきし包丁の音夕明り

白金 東 亜 未

青 葉

風わたる青葉濃淡声交す
足どりのゆるゆるとなりる青葉闇
明易し確と草花目ざめゐて
犇めきて葉のひそひそと明易し
朝と夕ここちよき風海芋咲く

四日市 長崎桂子

一声は二声に似て夏つばめ
迎へ火や父母のきてゐし風と知る
引きつづき命の軽さ大暑の日
冷房にきて午後のひげ伸びはじむ
をんな絡みの男の話秋ちかづく

新宿 堀内一郎

我が家では大豊作の実梅もぐ
実梅挽ぐ力無き手が梯子持つ
夫の忌や紫陽花の花ありつたけ
早咲きのコスモスの赤墓地の陽に
生きたしと精一杯の文字摺草

新宿 森山のりこ

京すだれ路地の格子戸櫺子窓
牛蛙日なか間のびし声交す
睡蓮の池をくまなく青大将
大賀蓮無の字無の字と写経せり
釣忍遣水かかる下駄の先

上高田 森 理和

古びたるアパートの庭カラー咲く
川沿ひに濃き淡き色額の花
水すまし一家揃って遠出かな
青柿のぽとりと一つ朝の雨
青芝や心を過ぎる願ひこと

見沼 山莊慶子

東京都庭園美術館

本三西

吉成美代子

隈笹に添うて緑蔭深くなる
陽に咲いて柏葉紫陽花すがすがし
めぐる池水面輝き初蜻蛉
緑蔭の風揺れてゐる昼餉かな
見上げれば葉がくれの枇杷撓むなり

半天をうすむらさきの棟かな
佐渡泊波の高さにつばめ魚
手をはなる風のまにまの鼓草
あかぼしのなかに飛翔や燕
晦明のなかほどにゐし燕

本三宮前

吉弘恭子

草 笛

鹿手袋 渡邊友七

草笛に草笛応へくるは誰そ
万緑に黒を被せて村暮るる
まどろみて見し夢忘れ藤の花
山百合の木陰孤高を守り咲く
ホトトギス大志秘かに継がんとす

雨上る凌霄の花上向けり
青柿の下だだっ子の言募る
娘の植ゑし枇杷熟る年の数ばかり
空を指す柏葉紫陽花払子めく
石の面ちぎり絵作る苔の花

清瀬 赤座典子

桜ヶ丘
安部里子

梅雨晴間銀座でランチしてきたる
夏嵐 月命日の母の声
新しきレースカーテン昇る猫
うぢうぢとサイダー飲んで軽くなる
シューマンのトロイメライに薔薇真紅

夜の秋付箋のページまたふやす
笛の音のまだぎこちなき夏氷
この町の祭が好きで孫が居て
捨て切れぬ背広がありぬ花十葉
高きビル蛍火となる警告灯

向島
遠藤
実

梅雨の蝶羽ゆるやかに地に降りぬ
六月の雨美しき竹の幹
何もかもそのままにして夏迎ふ
大仏を出で来し人に葉降る
草も木も雨も匂ひて五月闇

逗子
鎌倉喜久恵

朝刊の音一番に明易き
六月の緑の重さ渡る風
切り分けた西瓜の種の位取り
翡翠の止り木ばかり日の永さ
あぢさゐの濃き紫やひばりの忌

川崎
木村茂登子

生まれくる蕾染しや濃紫陽花
箒手に夫見送りぬ濃紫陽花
手鞠花たんすに戻す母の衣
不機嫌を忘れてしまひ梅雨晴間
おむすびの塩まだらなり夏木立

白金 齊藤裕子

梅雨ふかしATMに急かされる
母親の添寝されぬる青葉風
一つ身の浴衣の衿を為損ずる
バス停の大蜘蛛蠅を捏ねまはす
汐入の堀の匂ひや朝曇

銀座 篠田純子

千駄木 芝 尚子

申し分なくながらへて儼びにけり
ほろほろと生きる明け暮れさくらんぼ
絶え間なき車の流れ葱坊主
翡翠の一閃あとは何事も
明^{あけ}烏^{がらす} 夢^{ゆめの} 泡^{あは} 雪^{ゆき} 踊 子 草

折紙教室

宝泉寺前

芝宮須磨子

折紙の試行錯誤に明易し
明易やまづは厨の窓あかり
あぢさゐを折り上げ容離し見る
子等と行くふるさとの道若葉風
夏至の朝昨日の疲れそのままに

佐藤喜孝 『青写真』 より

坪内稔典

百人の老婆の顔に秋の象

(季語／秋)

百人の老婆の顔、それが秋の象だというのである。超現実的な光景にドキッとさせる。この句、句集『青写真』(1981年)から引いたが、作者は私の俳書展で表装をしてくれた表具師である。素敵な表装に私は幸せな気分なのだが、彼に句集があり、しかも掲出句のような不思議な句があることを知って、この人をとっても身近に感じている。

「晩紅舎をのぞいたら、額や掛け軸、ふるさき屏風の中で、温かみのある無骨な墨の字が自在に躍っていた。」「空間の使い方が見事だ。書の周囲を飾る布や和紙が句のイメージを引き立てる。」これは11月10日の「日本経済新聞」夕刊に出た俳書展紹介のコラムの一節。和紙や布で句を引き立ててくれたのが喜孝。俳書展は17日(金)まで。

二〇〇六年十一月十四日



とびぞめしもんしろつてふのあしのうち

(季語／蝶)

モンシロチョウの足の内が見えるわけではない。でも、あれが初蝶だと思つて見ると、まごまごと足の裏までが見えるのだ。そのような機微にこだわるのが俳句的発想といふものだ。この句、句集『青写真』（1981年）から引いた。古い句集だが、作者の40歳までの句が集められている。

「芝枯れてこぼれてきたる外側に」「冴返る力を入れてねむりをり」「寒燈のおのれを点すのみの闇」「せきれいやうすらひのはしみづがる」「ひとつまみの枯芝浮かぶ春の水」。これが『青写真』にある俳句的発想の濃厚な作だ。この作者、あまり知られていない。句集にある高島茂の跋によると、滝春一の「暖流」で新進俳人として注目されたらしい。

二〇〇七年二月十一日



未黒野をたちあがりくるものありぬ

(季語／未黒野)

昨日に続いて句集『青写真』から引いた。立ち上がってくるのは何か。野を焼き去った炎か、地霊か。あるいは焼かれた虫などの怨霊か。いずれにしても未黒野(すぐろの)の黒い気配を漂わせている。

「鶏卵とも落涙とも春燈しとも」「うぐひすの出だしのホゝ、明治の父」「しやぼん玉みんな激突してをりぬ」「葦まで四五間残し虎老ゆる」「春の晝バスに乗りかへシルル紀へ」「ばらまきし餌の泳ぎ出す春の水」「氣がつけばとしよりばかり春の晝」「春の蒲團昔は韓と陸つづき」。こうして秀句を抜いているときりがない。「氣がつけば」の句など、まさに現代の春を先取りしている。ともあれ、喜孝は大いに注目すべき今日の俳人なのである。

二〇〇七年二月十二日

とどまるとおもひしものを花筏	佐藤喜孝
忘却などありえぬ戦火五月の夜	芝宮須磨子
春月が照らふこの谿跳べとこそ	定梶じょう
ゆつくりと歩きなさいと山法師	須賀敏子
海渡る黄砂に楯の何もなし	鈴木多枝子
胡瓜の花しをれるまへの全き黄	竹内弘子
背やはき月光菩薩春ふかし	田中藤穂
黄金の足を揃へて鷺飛翔	東 亜 未
茄子胡瓜旬と言ふ語を如何やうに	長崎桂子
ゴキブリが垂直に下り夏はじまる	堀内 一 郎
新しき杖に替へた日牡丹観る	森山のりこ
銀蜻蛉殻に二本の臍の緒を	森 理 和



前月作品

竜舌蘭空に咲きしを眺めをり	山莊慶子
太鼓橋くぐりて涼し蘇州かな	吉成美代子
光りみな茄子にあつまる梅雨厨	渡邊友七
ウエディング・キスと牧師叫べり夏の雲	赤座典子
聞き手得て記憶あふるる五月尽	安部里子
筆談にありがたうあり釣忍	遠藤 実
白薔薇や主失ひしランドセル	王 岩
濡緑の手斧のあとや青葉闇	鎌倉喜久恵
貼るカイロ一枚のこし四月尽	木村茂登子
新樹光法務省より僧侶出づ	篠田純子
バラ眞紅寝ころぶがごと轉びけり	芝 尚子

喜孝抄



七月作品より

田中藤穂

とどまるとおもひしものを花筏
草屈春は眞書の縁の下

佐藤喜孝

一句目、まだ会はぬ人を悼みて一句、の前書がある。まさかこんなに早く逝かれるとは夢にも思わなかった。そのうちいつかお会いする日もあるうと思つていたものを、川面に浮かんだ花筏のように、もうとどめるすべはないのである。

哀悼と痛恨の思いが、優しく美しく表現されている。

二句目、草屈は叢の中にひそみ敵陣の様子をうかがう者、忍びの物見、だそうである。古い日本の家屋には天井裏だの縁の下だの、忍者の入りこめそうな場所がある。春は真昼のうららかな明るい縁の下にもひそんでいるとなると、縁側のある私が家も油断ならない。

俳句を詠むには、こういう限らない空想力がいるとなると、凡人の私など困つてしまうが、でも時空を超越したおもしろさを楽しめる一句だと思ふ。

忘却などありえぬ戦火五月の夜

芝宮須磨子

ありえぬに力が籠っている。先の戦争で、アメリカの空爆で家を焼かれた人、火の中を逃げまどつた人、肉親知人の命を奪われた人は、生きている限りその日を忘れることはない。けれども、中国や南方で、日本の戦火を浴びた人達も居ることを忘れてはならない。戦争は二度としたくないと皆願つているのに今も地球の上には戦争のなくなることがない。

海渡る黄砂に楯の何もなし

鈴木多枝子

黄砂は、以前は中国大陸の奥で舞い上がった

砂塵が風に乗って日本まで飛んできて空を濁らせ、黄色い砂を降らせるものと思っていました。今はその中に有害な化学物質など含まれているということで、健康被害が気になります。オリンピックでも問題になっている中国の大気汚染を早くきれいにしてもらおう以外に防ぎようがないのです。

グラビアの太宰治のひとへもの

竹内弘子

太宰治の写真で洋服姿は殆ど記憶にない。掲句もひとえものを着ている。グラビアの大きな写真なので袷かひとえか判るのでしょうか。それも白緋とか浴衣でなく、黒っぽいものを着ている姿が目につかぶ。彼の生い立ちも、その後の生活も、また死に方も特異なものであったせい、六月の梅雨の頃になるといつも思い出す作家なのです。「桜桃」など、戦後すぐの、物の欠乏した時代の人の心理を実に鮮やかに描いていて、忘れられない作品です。

弘子さんのこの句は事実だけをさらっと述べ

ていながら、陰鬱なあゝの太宰の顔や、その他いろいろなこととも思い出させてくれる秀句だと思えました。

舗装なき昔を残す風薫る

長崎 桂子

日本国中の道が舗装されて泥んこや砂埃がなくなつたのは何時頃からだろうか。皆が自家用車を持ち、輸送のトラックが昼夜を分たず長距離を走る。だが都会はヒートアイランド化し、土の道や芝生の上なら痛まない膝や腰に、アスファルトで固められた道は老人にはきつい。

桂子さんの句も、舗装のない昔のままの残っているところの風が薫っている、と昔を恋うている。たしかに風の薫りも涼しさも昔と今では違う。世界遺産となつた熊野吉野古道とか白神山地とかは昔のままの残っているところである。文明とか文化のもたらす便利と、それによつて失われ奪われるものの大きさを、しみじみと痛感するこの頃です。今後も道路を作るか作らないかは国や地方の行政でも大きな問題になつ

ています。

地球温暖化、大気や海の汚染、食糧の不足など、世界中が一つになつて考えねばならない時です。すがすがしい風の薫りをとりもどし共有したいものです。

妻にとって句集からくた半夏生

堀内 一郎

笑ってしまいました。一郎さんにとっては大事な句集が、奥様にとっては場所ふさぎのからくたで、早く捨てるなりなんなり片付けてさっぱりしたい。どこの家でもある光景ですが、一郎さんのがっかりした苦い顔も見えるし、奥様の気持もよく解るし、何十年も同じ屋根の下に暮した夫婦でも完全一致とはならないのがまた夫婦の味というものでしょうか。

半夏生は太陽暦七月二日頃、梅雨明けも近く、暑くなる前に主婦は家の中を片附けたくなる頃です。

牡丹の崩るる時や女体めく

森山のりこ

大輪華麗な牡丹の花は、ある時突然にハラハラと花びらを地に散らして、今茎の上にあつたのが消える。

それはまさに崩るるという表現がぴったりです。その有様をのりこさんは眼前にみられたのでしょう。そしてそれを女体めくと感じた。このなまめかしい句の作者ののりこさんは八十路なかばです。のりこさんの感覚の若さに敬服。

夏初め魁夷の青を着てみたし

山莊慶子

魁夷の青といえ、あの深くあざやかな藍青色が目には浮んでくる。夏が来て、魁夷の青を着てみたいと思っただけでも素敵ですが、いつそ「夏初め魁夷の青を身にまよふ」としてしまつたらもつと素敵、俳句は嘘が許されるからといつも伺っていますから……

楊貴妃の棟々簾連ねたる

吉成美代子

今回の五句は中国旅行で得られたものようです。楊貴妃が暮した棟々が残っているのでしょうか。昔ながらの簾を連ねてとなると楊貴妃が今にも現れそうですね。

乳母車時折裸足跳ねてをり

赤座典子

乳母車の中に寝かせられている赤ちゃんがご機嫌で、元気に手足を動かしているのです。そこでこちらから見ると、裸足の小さなあんよだけが、時々乳母車の上に跳ねるのが見えて、何とも微笑ましい光景です。本当に赤ちゃんは天使です。

聞き手得て記憶あふるる五月尽

安部里子

傾聴ボランティアというのがあるとききますが、自分の話に本気で耳を傾けてゆつくり聴いてくれる人があるのは、とても嬉しいものです。働いている人や若い者達は、忙しくてなかなか話相手になる時間がないようです。良い聞

き手を得たことで、記憶が次から次とあふれ出て話が尽きません。五月の終りの日がよい日になったことでしょう。

語る人の生き生きした様子も、聞き手の姿も素直に伝わってよい句だと思います。

山吹のひそやかに吸ふ月あかり

遠藤 実

山吹の花の眩いばかりの黄金色は、人間達が眠っている夜中に、ひそやかに月光を吸込んであの色を溜めこんでいたのだとは知りませんでした。それにしても俳人は、とくに男の方は口マンチストで、いつまでたっても年齢をとられないようです。



特別作品鑑賞

雛の家 定梶じょう

ペルー 須賀 敏子



佐藤 喜孝

雛の家 単線 鉄路裏を過ぐ

定梶じょう

家裏へ回る西日となりにけり

これもじょうさんの句である。西日では「西日とどく筆筈よ春画秘めてけり」といふ魅力ある作品もある。今回の特作はじょうさんの意図といふより私の願ひで特作にしていたのだ。この句、なんといふこともない日常の光景であるかもしれないが、何回も読むに耐える鯛のやうな句である。ドラマの一場面のやうに映像が浮びあらずなど考へて見たくなる。

植田澄み電柱変圧器が写る

瓦斯タンク 聳ゆ五月の景として

周りに自然が溢れている地で、「電柱変圧器」「瓦斯タンク」を俳句にしてゐる。不安定に電柱の上に乗っかってゐる重たげな変圧器。田植も濟み水のにごりも納った水鏡にはじめてのやうに写る変圧器。「五月の景として」と言切った光景も鯛の味がする。次回はじょうさん自身が構成された特作を期待している。

マチユピチュに雨期の終りの二重虹 須賀 敏子

敏子さんは俳句に取組んでから十年余になる。特作旅吟を意欲的に作られるようになられた。今回の旅行地はペルー。マチユピチュは行けたらいいなあと多くの人が憧れる世界遺産である。旅吟を作品化すると難し。興奮が先走ったり、絵葉書俳句になりがちである。私も旅の俳句は捨て難く発表するものの、今一つの感がある。それでもあの感動を書きとめておきたいといふおもひには抗しがたいものがある。感情の入らない俳句は面白くないが、感情を律しないと人は読んでくれない。今回は地に足の着いた作品で構成されてゐる。その中でも掲句は旅情の高まりを包摂し、広大な空間を描けてゐるとおもふ。「マチユピチュ」といふ新しい俳枕に感謝。

近世俳諧と漢詩文 拾

王岩

「江上数峰青」とは誰やらが神句のよし

蜀魂ほとときす啼て江上数峰青 道彦

道彦、鈴木氏。宝曆七年（一七五七）〜文政二年（一八一九）。別号に金令舎・十時庵などがある。仙台の人で、俳諧は白雄に師事する。句集に『蔦本集』があり、問題の句はここに載る。前書及び句中に見える「江上数峰青」は、錢起の五言古詩「湘靈鼓瑟（湘靈 瑟を鼓す）」を締め括る詩句である。

善鼓雲和瑟、 善く雲和の瑟を鼓すは

常聞帝子靈、 常に聞く 帝子の靈なりと

憑夷空自舞、 憑夷は空しく自ら舞ひ

楚客不堪聞、 楚客は聞くに堪えず

苦調 金石より凄じく

清音 杳冥に入る

蒼梧来怨慕、
蒼梧は怨慕を来し

白芷動芳馨。
白芷は芳馨を動かす

流水伝湘浦、
流水 湘浦に伝わり

悲風過洞庭。
悲風 洞庭を過ぐ

曲終人不見、
曲終りて 人見えず

江上数峰青。
江上 数峰青し

堯に娥皇・女英という二人の娘があり、皆、舜の妃となった。舜が南方巡幸中に蒼梧の野で崩じると、その二妃は悲嘆のあまり、湘水に投身し、神女になったという。湘霊とは、神女と化した二妃を総称し、後世の詩文では湘君・湘夫人・湘妃などと呼ぶ。

「湘霊鼓瑟」の大意は、湘君が舜帝の魂を慰めるために瑟を奏でると、その清らかで悲しい調べに誘われて水神も舞う。屈原は聞くことさえ堪えられないほどである。悲愴な音色は鐘や馨よりも遙か遠くまで悲しげに響いていく。舜の魂も眠る蒼梧から遙々やって来て、二人の妃との離別を悲しんだ。水中の香草はいい香りを周りに漂わせ、その調べは流水のように湘水の岸辺まで伝わり、悲風のように洞庭湖の湖面を渡っていく。やがて瑟の音が終わると、周りに人影は見えず、岸辺にただ幾つかの峰々が青くそそり立つのみであつ

た。

錢起は天宝十年（七五一）に進士に及第している。『唐才子伝』（元・辛文房）巻四によると、錢起は進士科を受験するため都長安に赴く途中の京口の旅館に泊まった際、彼は月明りの戸外で散歩していると、「曲終人不见、江上数峰青」と詩を吟ずる声がどことなく聞こえてきた。不思議なことに、周りには詩を吟じる人影などない。錢起はこの事を訝しく思っていたが、後日、進士科の試験場（都長安の皇城内に置かれた礼部南院）に入ると、作詩問題は「湘靈鼓瑟」であった。そこで錢起はその月夜に聞いた詩句を結びの一聯二句として、「青」の韻を踏んで一気に五言古詩を詠んだ。当時の試験官李麟は錢起詩の結びの一聯二句を大変気に入って、「是れ必ず神有りて、これを助くるのみ。」と称賛したという。そこで錢起は見事に及第した。この有名な「月夜 鬼謡を聞く」という逸話は『旧唐書』と『詩人玉屑』（宋・魏慶之撰）にも伝わっている。道彦もこれを知っていて、「江上数峰青」とは誰やらが神句のよし」という前書きをつけ、句を詠んだわけである。

鋭い鳴き声を一声落として蜀魂が飛んでいく。後は静寂の世界、水辺に幾つかの峰が青々と聳え立つのみ。漢詩を上手く生かして詠み得た作品である。「動」と「静」との融合及び「聴覚」と「視覚」との切り替えによる精彩のある「詩中画」だと言えよう。

このように唐詩の詩句をそのまま転用する句例は、道彦以前に服部嵐雪の杜牧「江南春」の詩句を詠み込んだ「はぜ釣るや水村山郭酒旗風」がよく知られている。

鈴木道彦

あふむけば口いつぱいにはる日哉
いらぬものたゞなげこむや薄原
うしろからよばるゝ花のたそがれや
のちの月葡萄に核のくもりかな
はるの水二階の人のながめかな
ふはとぬぐ羽織も月の光りかな
ふる雪にむいて飯くふ小家かな
涼しさや百合も芒も手にさはる
大名のみぢふみゆく小はるかな
黄鳥やうき世にすまば中二階
夏と秋と二つにわりし西瓜かな
家々の親子むつまじ年のくれ
魚くふて口なまぐさし昼の雪
元日やゆふぐるるまでささら波
紅梅や雨のふりたるぬり盥
重忠が眼ざしに似たはつ松魚
春の寒さとへば露の苦みかな
水にそふて人ゆく春の余波かな

世は暑し膳にむかへば妻子あり
蟬なくやわづかに見ゆる海の端
蝶のゆく所はわれもゆきたしよ
二日見ぬ猫は戻りて松の雨
二里来ても我にかぶさる雲の峰
熱き日や百日紅のちりもせで
蠅打つてつくさむと思ふ心かな
白魚のすこしまがりて長閑なり
露の葉のうらはあかるしかたつぶり
棒さげてゆけば鴨なく沢辺かな
夢になく我がおとろへや軒の雁
夕霧の中をふり出す小雨かな
淋しさにつけて飯くふ宵の秋
いざよひの小ぐらき松の横たはり 一茶

家をゆづりて露に寝るころ

成美

ひと時雨するや五月の雨の中 士朗
世人みななけなけほとゝぎす 成美

あをかき集

竹内弘子選

(六人目以降五十首順)

新緑やシチリア産の塩をふる

六月や森の鴉の甘え声

煮麺に浮かす手鞠麩梅雨寒し

たたなづく雲居に紛ふつばくらめ

あえかなる薄むらさきの棟かな

負ひ紐くるりと結ぶ春の道

恋猫の寝息ひろぐるの中にゐて

木の芽どきいつも眠っている猫の尻

夏の蝶小さき水に羽たたむ

とりすます横顔見せて夕端居

川の瀬に鱧のぼり来を見てをりぬ

横須賀のドブ板通り雷一過

遠雷にピクと動きし猫の耳

ご近所も立働きて梅雨晴間

誕生日祝ふファクスさくらんぼ

穀象や切り良く終る時代劇

大方の盛り過ぎをり菖蒲園

定梶じょう

鎌倉喜久恵

吉弘 恭子

この杭の山羊を結はへし明易く

駆けてきて犬があへぐよ棕櫚の花

玫瑰や一線寄する波頭

枇杷盗むこの木の幹の攀ぢやすし

くちなしの雨が濡縁ぬらしに來

まひるまの青紫陽花の幽さかな

五月闇善女と無頼すれちがふ

蘭座布団明るき声に迎へらる

美容室日除の下の茄子の花

振舞はる霧の育てし新茶とて

緑蔭のふと濃くなりて乳母車

色つやをほめては口にさくらんぼ

田中 藤穂

赤座 典子

芝 尚子

梅雨に入る赤い傘さし回転す

安部 里子

赤ん坊のでんでん虫の行方かな

池のぞく犬かき亀のぞろぞろと

遠花火この頃親の有難み

古池の水もり上る大き鯉

戸棚涼し古き大皿割りてより

朽ちた木の静かに眠り墓地となる

鱧鮓のカボチャなじみて故郷の味

芝宮須磨子

麦茶飲む川より低き家に住み

遠藤 実

脈絡なくしゃべりつづけて梅雨しとど

舟溜り静まり返る日の盛り

夏の真夜なつかしき歌ラジオより

薬師講いちにち白い夏椿

誘はれて夏の札幌へ思ひはるか

須賀 敏子

魚焼く匂ひが馴染む夏至の路地

湧水の絶えることなく花菖蒲

どこにでも置いて置かれてゐる団扇

木村茂登子

奥武蔵ひと山覆ふ額の花

森林浴身軽に出でしスニーカー

塩の道植田に風の吹きわたる

あぢさゐが見守つてゐる通学路

谷空木百体観音塩の道

鈴木多枝子

水色の星の一隅夏来る

齊藤 裕子

物置を住処としたる青大将

水生花園見え隠れする夏帽子

梅雨の蝶郵便受に何もなし

新緑の蔦まとひけり松大樹

父子して麦笛競ふ畑の中

夏鷺の通ひくる枝ひょうたん池

近頃は忘れ癖つき春帽子

亀遊ぶ六月の森ゆたかなり

八ヶ岳ポツンポツンと遅桜

東 亜 未

藍の香の立つや祭の小競りあひ

篠田 純子

しゃがむ子に母もかがみて風薫る

思ひきり首伸しみる小白鷺

鼻の先ひからせてくる夏の亀

宮の森卵の花くだし清清し

敷石を卵の花くだしそろそろと

香のこもる卵の花くだしのドーナツ屋

梅雨はげし跳ねる音ゆく蛇の目傘

焼き立てのパンのつぶやき蟹の泡

雨の日は外へ外へと池の蜷

月涼し白く浮きをり湖の波

池渡る風の涼しく友を待つ

足元の湿地気遣ふ蛩狩

水音や蛩の乱舞見付けたり

温泉の蛩祭も終りけり

駿河路の海ゆらゆらと梅雨晴間

花びらを敷きつめて去る夏台風

住居跡繁るにまかす夏の草

大いなる夢語る児と夏の雲

長崎 桂子

森 理和

森山のりこ

吉成美代子

名も知らぬ鳥の遊ぶや梅雨の瀬に

子燕のこぼれむばかり検査了ふ

夕虹や墓群れ踊る町の中

田を植うるそばに釣人たり得たり

水すまし小さい風が来て愛す

渡邊 友七

選ををへて

この杭の山羊を結はへし明易く

定梶じょう

くちなしの雨が濡縁ぬらしに来

赤子を生んだ母親が、理由はいろいろあるが母乳を与えられないことがある。牛乳や粉ミルクの手に入らなかつた頃、山羊を飼って草をたくさん食べた山羊の乳を搾って赤子に与えたときいています。山

羊を結わえた杭が残っているのです。

次の句は「くちなし」に関わるストーリーがまずある感じ です。以下「雨が濡縁濡らしに来」と、たたみかけるような調子に魅力であります。

まひるまの青紫陽花の幽さかな 田中 藤穂

箱根湯本から強羅へ行く登山電車の両側の「紫陽花」は観光ということで手入れがよくされていて見事というほかはない。鎌倉の寺院など道も狭しと左右の紫陽花を分けて参詣する善男善女でにぎわう。名の通り青から赤紫へ変つてゆき、薄茶、白もあります。町中でも見られますが、この「青紫陽花」は、田端のご自宅ではないかと思いました。「昏、暗、冥」ではない「幽」が際だつて、他と分れるところです。〃幽邃〃物静かで奥深いという意味です。吟行の折のお庭の佇まいが浮んできました。

煮麺に浮かす手鞠麩梅雨寒し 芝 尚子

このところ連日ひどい暑さで、冷たい索麺ということになりがちですが、お腹を冷やさないように一度晒して水を切った索麺に、具を入れた熱い汁をかけていただいています。「手鞠麩」を入れると彩りもよく、いつそうおいしそうですね

木の芽どきいつも眠っている猫の尻 吉弘 恭子

作者は面倒見のよい方なので、いつの頃からか「猫」が居付くようになってしまったようです。またへ恋猫の寝息ひろぐる中にゐてゝなど、春風駘蕩といったのんびりムードですが、家事、本紙の発行その他多忙な方なので、「猫」と一緒に束の間の休憩をとっていらつしやるのでしょう。

川の瀬に鱧のぼり来し見てをりぬ 鎌倉喜久患

逗子にお住まいの鎌倉さんは、当然ながら海の眺望がきき、また近くを川が流れているという風光絶佳を満喫しておられる。

此度はその川瀬を「鱧」がのぼってくるのを見ているというのである。羨ましい。

へ一片の蓼の葉あをし鱧をそへ 風生

穀象や切り良く終る時代劇 赤座 典子

「穀象」別名「米の虫」。一般に米をあまり買置きすることはないし、駆除の方法も進んで穀象自体を見かけることが少なくなりましたが、世界各地に分布し、米穀類の大害虫なので、強力な駆除剤を用いているのではないかと怖い気がします。妙に「時代劇」に合う字画の多い黒つぶく、小さい甲虫です。

梅雨に入る赤い傘さし回転す 安部 里子

「梅雨」に入りたての頃、目黒の旧宮廷に吟行した折の句でしょうか。お気に入り傘をさして、くるりくるりと回転させているのではないかと思います。

薬師講いちにち白い夏椿 遠藤 実

薬師如来を供養する講会が行われていると思われる。加入している人達が集まって運営に関する事柄を申し合せたり、取り決めたりなさっておられるのでしよう。

「白い椿」の映りがいいと思いました。

あぢさゐが見守つてゐる通学路 木村茂登子

「通学路」を歩いているのは、低学年の児童のようだ。一頃「みどりのおばさん」という学童擁護員の方が辻々に立っておられた。

「あぢさゐ」の盛りは、垣の間から花や葉がもくもくと路に迫り出して、通学路を狭めるのが気になった。児童の親たちも、毎朝祈るような気持で子供たちを送り出しているのだ。

新緑の蔦まとひけり松大樹 斉藤 裕子

目黒の庭園を散策した折の句だと思う。以前、落葉の頃たずねたとき、一抱えに余ると思われる「松

大樹」は、龍の鱗のような枯色の樹肌を見せて眼前にそそり立っていた。

此度は、そのごつごつした幹を「新緑」の蔦が這い上がっていたというのである。見たままを捉えて剛と柔を描きあげた佳句です。

藍の香の立つや祭の小競りあひ 篠田 純子

お祭に関する粋な風情も、時代と共に薄れてゆく感のあるのは否めませんが、日本橋に生れて銀座に住んでいる純子さんが目をひかせているうちは大丈夫という気がします。「藍の香」は印半纏のことではないかと思えます。粋だから「小競りあひ」で済んだのだと思います。涼やかな味のある句。

鮓鮓のカボチャなじみて故郷の味 芝宮須磨子

生のうどんと「カボチャ」などの野菜を味噌で煮込んだもの。山梨県の名物でおいしいものですが、この猛暑では身体まで煮えてしまいそうです。どち

らかという冬食べ物。

ご商売柄、料理の味をみるのが確かな方なのだと思います。

谷空木百体観音塩の道 須賀 敏子

よくあちこち旅行をなさる羨ましい方です。「塩の道」。以前、白馬岳の方へ吟行旅行したことを思い出しました。ビールの香りや苦味の元になるホップの実が、道の左側にゆれていました。歩荷宿や御地蔵さまがありました。かなりの道を下って帰りの駅に着いたように覚えています。

梅雨の蝶郵便受に何もなし 鈴木多枝子

ダイレクトメールの類も何もないというのはめずらしいけれどそんな日もありますね。

来る筈のものを心待ちにしているのではないが、何もないというのは淋しい気がする。瑣末なようですが実感があります。

香のこもる卵の花くだしのドーナツ屋 長崎 桂子

店先で買って帰るだけならおいしそうな匂いですが、店内にはいると油の混じった噓せるような感じがするかもしれません。「卵の花くだし」が、さもありませんと思わせませす。

雨の日は外へ外へと池の蜷 森 理和

「あを」の月例会の会場「カフェ傳」の広い石畳の庭の隅に、石で作られた池があつて、小さな水生動物がたくさん棲んでいる。

螢の餌になる「蜷」もいるらしい。雨が降ると池の外へ出たがるという。石畳の上に「蜷の道」をつけるのかしら、などと思いをめぐらせてはたのしんでいる此の頃です。

温泉の螢祭も終りけり 森山のりこ

行き付けの温泉旅館で行われた螢祭のことではな

いかと思ひました。

筆者の古い歳時記〈昭和38番町書房〉に、「都市の近郊では野生のホタルは見られなくなつた」とありますが、その後、農薬の規制が言われ、田圃や小川に出る螢の数は減つてもいなくなることはありませんでした。温泉など保養所のある処には螢の出るポイントがあるのだと思ひます。

名も知らぬ鳥の遊ぶや梅雨の瀬に 吉成美代子

川べりに来る鳥はいろいろですが、全体がオリーブ色で貌から腹へかけて赤く、繁殖期など明瞭な声で啼くのは水鶏です。

〈葛飾の夜の雨暗き水鶏かな 吐天〉

水すまし小さい風が来て愛す 渡邊 友七

「愛す」など、ふつうテレして表現し得ない言葉の使い方が個性的です。「水すまし」と「あめんぼ」は混同しがちですが、これは一センチ足らずの「水

澄」(まひまひ)の方です。「小さい風」にもツイーと揺れる。「愛」されているのだそうです。

鼻の先ひからせてくる夏の亀 東 亜 未

じつと並んで甲羅を干しているのしか見たことがないと思っていました。そういえばみじかい足を頻りにうごかしてこちらに向ってこってくることもある。「鼻の先」、亀の鼻はどんなだったかしら。リアルで面白い句です。



あを吟行会のお知らせ

九月は休会です。

吟行地 鶴見 總持寺

日 時 10月19日(日) 午前10時半

集會場所 JR「鶴見」駅西口

句會場 總持寺(昼食 お寺で精進料理

費用 會費 三〇〇円

昼食 二一〇〇円

拝観料 四〇〇円

申込み〆切 10月10日

申込先 木村茂登子

0 4 4 3 4 4 4 1 4 7

あをキーワード俳句辞典(い)

痛

夏負けの始まりのまづ歯が痛む

田中 藤穂

ががんぼの脚一本をのこし去る

吉弘 恭子

深爪や晩夏の湖畔にて痛む

定梶じょう

一本の紅葉が雑木の栄え

竹内 弘子

虫時雨頭痛なかなか癒えません

長崎 桂子

掃き残る一本二本松落葉

東 亜未

痛み止め魂抜けてゆく暮春

後藤 志づ

芒原手折り一本持ち帰る

早崎 泰江

指先に痛みが残る桜冷

森山のりこ

原爆の日一本の棒喉にあり

鎌倉喜久恵

いたはる

炎天を来て飴玉に勞られ

鈴木多枝子

一夜にて虫に喰はれし葡萄の葉

森 理和

勞られ孫とデートに雪しまき

芝宮須磨子

水密の香妖しき一夜かな

篠田 純子

折れ曲るやうに勞りあふ夜寒

篠田 純子

渇水の一夜明けての梅雨出水

赤座 典子

いたはりの声の沁入る初時雨

斉藤 裕子

新涼や一夜泊りの太柱

渡邊 友七

コスモスやいたはり合うてゐるやうな

芝 尚子

一夜干し春の豆鮎箱に群る

森 理和

一枚

一枚の紙うら返る去年今年

堀内 一郎

一言も話さぬ風邪のひと日かな

芝宮須磨子

冬の鴉翔たんと掴む田一枚

渡邊 友七

もう駄目の一言で済むちやんちやんこ

堀内 一郎

麦秋と云ふには小さき畑一枚

鈴木多枝子

字幕のやう一言添ふる年賀状

赤座 典子

寄鍋や一枚ぬいで七味かけ

安部 里子

一言に心の凍る女あり

安部 里子

朧夜の一枚あけてある雨戸

田中 藤穂

追伸の一言重きこぼれ萩

遠藤 実

一本

六月の句会

傳

中野区 カフェ傳

六月の風を感じて塩の道
 蠅生まるこの頃親の有難み
 梅雨の髪一本にあるDNA
 どこにでも置いて置かれて団扇かな
 蛍火の一火たりとも落着かず
 箸を置き五人注視の蠅一匹
 青時雨駆け抜ける子の膝光る
 手毬花たんすに戻す亡母の衣
 色つやをほめては口にさくらんぼ
 桑実る月日が隔つ従兄弟ごち
 水音の微かにありて蛍飛ぶ
 わが影のずんぐりとある薄暑かな
 神鏡はたしかに穴や青葉蘭

敏子 純子 弘子 茂登子 寒林 理和 喜久恵 裕子 尚子 敦子 美代子 綾子 喜孝

調

さいたま市岸町公民館

あぢさゐに雨来て子等の歌濡るる
 凌霄花やゴムの燻るにほひせり
 黄揚羽の深呼吸吸して飛びたちぬ
 人に会ふ夜目に黄色の夏の服
 水馬一家そろって遠出かな
 昼に見て黄の花が咲く夜の海

友七 弘子 敦子 綾子 慶子 喜孝

あを吟行会

目黒自然教育園

青風森にかくれぬものは何
 万緑の一劃を占め老大樹 喜久恵
 しゃがむ子に母もかがみて風薫る
 熊笹に添へば緑蔭深くなる
 棕の木の間あかるし梅雨晴間
 細小水落葉踏みしめ夏鴉
 朽ちた木の静かに眠り墓地となる
 をさなごの目にとまりけりかたつむり
 新緑の蔦まとひけり老の松
 六月の森にぼっかり穴がある

茂登子 東亜未 美代子 弘子 恭子 里子 綾子 裕子 喜孝

七座句会
 花菖蒲雨を明るくしていたり
 子等と行くふるさとの道若葉風
 盆栽のやうに地球を眺めをる
 二分の一息子は他人三白草
 わがそばの空間ゆがめ梅雨揚羽
 燕の子築百年の軒に生れ
 間の抜けし日中に響く牛蛙
 ほろほろと年きる明け暮れさくらんぼ
 喪心にひらく泰山木の花
 夏めきし包丁の音夕明り
 春泥やもう来ないかと葉売り
 蘭座布団明るき声に迎へらる

夏子 須磨子 喜孝 純子 木枯 寒林 理和 尚子 綾子 東亜未 多枝子 藤穂

七座句会

中野区・小川苑

連句勉強会 九月第一日曜
 希望者は 佐藤喜孝まで
 (090-9828-424)

傳句会 九月第3火曜
 カフェ傳 森 理和
 (03-3368-4263)

調句会 九月第3金曜
 岸町公民館 竹内弘子
 (0488-86-3501)

あを吟行会 九月
 休会

七座句会 九月第4火曜
 小川苑 吉弘恭子
 (090-9839-3943)

東京音頭は郡部の地が市内に合併し、東京市が廣くなつたのを祝するために行はれたやうに言はれてゐたが、内情は日比谷の角にある百貨店の廣告に過ぎず、其店で揃ひの浴衣を買はなければ入場の切符を手に入れることができないとの事であつた。それは兎に角、東京市内の公園で若い男女の舞蹈をなすことは、これまで一たびも許可せられた前例がない。地方農村の盆踊さへたしか明治の末頃には縣知事の命令で禁止せられた事もあつた。東京では江戸のむかし山の手の屋敷町に限つて、田舎から出て來た奉公人が盆踊をする事を許されてゐたが、町民一般は氏神の祭禮に狂奔するばかりで盆に踊る習慣はなかつたのである。

右は永井荷風の『作後贅言』の一節。七月の佃島吟行はもんじや焼を食べ気分をたかめて盆踊を見に行つた。見るだけでは足らず輪の中に投じた人もゐた。戦後の東京はあちこちに空地があり、仮設舞台で演芸会がよくもよばされてゐた。楽器といへばハーモニカぐらい。へ啼くな小鳩よ、心の妻よ……など耳に残つてゐる。盆踊には「三池炭坑節」や「東京音頭」が流れてゐた。「東京音頭」

をきくとうかれた気分にはならず、かへつてしんみりしてしまふ。神宮球場へ偶に行く。ヤクルトの応援もあるが、東京音頭をききに行くのも目的の一つ。大事な物を見失わないために……とはすこし大袈裟。「最初の記憶」を作り終えずこしほつとしてゐるこの頃である。盆唄と音頭は發生が違ふであらう。(喜孝)

御芳志多謝

鈴木多枝子様

田中藤穂様

森山のりこ様

二〇〇八年八月号

発行日

八月五日

発行所

東京都中野区中央2・50・3
090・9828・4244

印刷・製本・レイアウト

竹徳房
佐藤喜孝
カッタ／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝

郵便振替

会費 一〇〇〇〇円 (送料共) / 一年
00130・655526 (あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。

「あを」入会ご希望の方は下記まで。

自選作品は5句（作品により添削あり）

「あをかき集」は7句投句。

普通会员 10,000（年間）

インターネット会員（冊子無し）

5,000

連絡先

satou.yositaka@rouge.plala.or.jp



Café 傳

中野区上高田 1-1-1

03-3368-4263